

共同の原理としての 「弱さ」

このところ、何かと「弱さ」を見せられない社会的風潮が強まってきていますが、他方で各方面から「弱さ」がもちうる意義・可能性への注目が集まってもいます。そうした状況において、教育はどのような立ち位置に置かれているのでしょうか？

一面においては、個別化された「学力保障」や「競争の教育」体制の下、「弱さ」を見せられない社会の構築の土台形成を担ってきたという側面があります。他方で、そうした教育のあり方を批判しながら、共同的な学びや学校生活を探る実践もさまざまに積み重ねられてきました。

また、より本質的には、「(自分で)できるようなりたい」という個々の発達要求に応じていくことと、「できなさを受けとめる」「他者に委ねる・頼る」ということを体得していくこととの間のジレンマもあります。その意味で、「強さ／弱さ」というテーマに対して教育(学)は、非常にアンビバレントな立ち位置におかれてきたといえるでしょう。

そこでこの特集では、「弱さ」を見せられない社会の実態とその構造をつかむとともに、それを乗り越えていくための教育(学)の課題について、実態・理論・実践を行き来しながら考えてみたいと思います。

これを機に、自分の実践および自分自身の「弱さ」、そしてそれをとりまく社会の風潮(空気?)について、それぞれ振り返ってみるとともに、周りの仲間とともに語り合い、課題を共有していただければと思います。